

対談：テキスタイルの魅力

日本画家、東京藝術大学教授 宮廻正明

京都服飾文化研究財団チーフ・キュレーター 深井晃子

INTERVIEW: POWER OF TEXTILE

Masaaki MIYASAKO, Professor, Tokyo University of the Arts

Akiko FUKAI, Chief Curator, Kyoto Costume Institute

Textiles have a very long history. They have been produced in many places all over the world by highly diversified manufacturing methods or designs. Textiles produced with advanced skills sometimes have artistic values that are even comparable to the pictorial arts. Because it is difficult to reproduce such textiles and they are very expensive, they have often been reused. Every time they are reused, they change their appearance and are transformed by various methods. Just as we enjoy how natural dyes change their colors with time, we can enjoy the “beauty changing with time” of those textiles. This is one of the charms of textiles.

Today, the environment around textile production is becoming increasingly serious, and in Japan skilled weavers are retiring one after another. To protect and develop our excellent textile culture, not only through people involved in the industry but also in society as a whole, it is necessary for us to recognize that textiles have additional values that enrich goods and our spirits, not to pursue low prices only.

深井（以下、F）：今号のドレスタディでは、さまざまな形で私たちに影響を与えているテキスタイルの力強さ、魅力について焦点を当てております。

テキスタイルの歴史は非常に古く、世界のさまざまなところで作られ、製作技法やデザインも非常に多様です。昔から人々はテキスタイルに魅了され、憧れを抱き、それは大きな文化的経済的な動きを引き起こしました。テキスタイルの魅力によって、古今東西、趣味的な個人のレベルから大規模な美術館まで、さまざまなコレクションが形成されました。

宮廻先生は、日本画家として国内はもとより、海外でも活躍しておられますが、テキスタイルの魅力に取り付かれたお一人として個人的な蒐集もされているとお聞きしています。そのきっかけは、どういうところにあったのですか。

宮廻（以下、M）：昔から骨董品が好きで、十代の頃から色々買い集めていました。裂地の蒐集もその頃からで、最初買ったのは18歳の時だったでしょうか。

実家が鳥根県で、広瀬紺の産地（安来）がある地域です。他にも近隣の鳥取県境港では（弓）浜紺が作られていたりして、小さい頃から染織品に触れる機会があったことも関係

あるかもしれません。それからおよそ50年。もう半世紀です。(笑)

その間いろいろな国に出かけたのですが、訪れた先で古裂を扱っている場所を見つけては行って買い付けています。だからあまり一貫がありません。

西アジアでは、矢絣とか、間道のような縞柄とか、日本の伝統柄に近いものを見つけました。西アジアのテキスタイルは、色遣いの珍しいものがあるって、柄も多種多様で面白いです。

F：先生のコレクションには、中近東以外の地域のテキスタイルもありますね？

M：日本や中国、インド、東南アジアのものもあります。体系的に入手すればもっとコレクションとして形になるのかもしれませんが、きれいだと目に留まれば構わず飛び付いてしまいますね。

F：このベルベットは。肌理が非常に細やかで……。色の組み合わせも斬新。地糸に別の色を使って、表と裏で色の表情をがらっと変えていますね。どこのものでしょうか。

M：これはシリアで入手したテキスタイルです。技術が高いことは見るとよくわかります。

F：これはトルコのテキスタイルでしょうか。トルコの柄の中には、ヴェネチアの貴族やフィレンツェのメディチ家の肖像画に描かれている衣装の柄と共通するものがあります。かつてトルコやインド、中国の方がよほど高度な染織技術が発達していたわけで、ヨーロッパ諸国は競って模倣していました。染織品交易の歴史は興味が尽きません。

M：私はテキスタイルを見ると励まされるんです。

布は一枚たりとも手を抜いては作れません。全て端から端まで織らなければ布は存在することができない。良いところだけ織って終わり、ということはありません。私も絵を描く時、人が見れば重箱の隅だと思われるかもしれないような細かな部分の表現にこだわります。一幅の絵を仕上げるのも手間のかかもので、ある意味で格闘ともいえる大変さがあるわけですが、一糸違わず縫い込んだり織り上げたりしていく染織の作業から比べると、われわれ絵描きの労力はどうってことない、と思ってしまう。実際、緻密に織り込まれたテキスタイルを眺めていると、救われた気持ちになります。「絵は楽だな」って。(笑)

F：一枚の精巧なテキスタイルは、時として絵画に比肩するほどの芸術的価値を持つこともあるということでしょうか。複雑な絵柄の場合には、1センチ織るために気の遠くなるような時間がかかってしまう。

テキスタイルが結ぶ過去と現在

M：古い衣装を後の時代に解体して作り変えた時に出たものがあります。アフガニスタンのカ

ルザイ氏が、自分のシャツを古い衣装の裏地を使って作ったときに出た、余り裂を手に入れてきました。繊細な縞柄で、見ていて飽きません。表地もきれいに残っています。

F：表地のカッティングから見るに、カフタンかもしれません。

技術が発達していたとはいえ、上質なテキスタイルは高価で簡単には製作できませんから、使い回すことが多くなります。KCIで収蔵している18世紀のドレスにも、明らかに前の時代のスタイルから作り直したものがありますし、日本でも茶道具や掛け軸の装具に使われた名物裂はよく知られています。歴史的に見れば、素材のリユースは資源を有効活用するための最もポピュラーな方法ではないでしょうか。現在のように、新しいものを使うのが当たり前になったのはごく最近のことです。

M：劣化すると捨てて、新しいものに替えていく。要するに「使い捨て文化」が一般化して、「時間的経緯の美」を楽しむ習慣がなくなってきた。買った瞬間がベストの状態、それからの変化は「退色」や「劣化」と言って、現在ではマイナスの要素です。昔はそれを受け入れ、日本では「古び」や「侘び」「寂び」の美学へと発展させた。

そうした文化が衰退した一つの要因は、利便性を追求し始めたことにあるかもしれません。例えば、天然染料は色の移ろいを楽しむことができますが、化学染料の場合、その発明のおかげで色彩豊かになりましたけれども、色の変化が面白くない。染め上がりの時が一番きれいに見えてしまう。日本画も、絵の具を膠で溶く不便さがありますが、濡れた色が乾いていく中で変化する様子を楽しむことができます。これは描いている人しかわからないので、絵描きの特権ですし、取り分でもあります。

F：鑑賞する側からすれば、そんな魅惑的な場面に立ち会えないのは残念です。

先生の作品を拝見すると、まるで織物のようなテクスチャーに目が引かれてしまいます。質の高いテキスタイルに囲まれているからなのかと想像しています。

ファッション・デザイナーの中にも、先生のように世界各国のテキスタイルに興味を持った人がいます。ポール・ポワレという20世紀初頭に現れ、非常に有名になったフランス人デザイナーですが、彼のデザインするドレスには、オートクチュールでは見ることのない珍しい生地が使われることがよくあります。

ポワレは、ブランドの宣伝や個人的な旅行で世界各地を訪れていました。行く先々で興味を引いたテキスタイルを手に入れて持ち帰って、それを自身の衣服デザインに応用しています。KCIの収蔵品にも、そういった生地を使った彼の作品がかなりありまして、現在、彼の服作りについて調査しているところです。中には端切れの形状をそのままデザインに落とし込んだと思われるものもあって、大変興味深いものです。

M：ある古い裂から現代の服を連想したり、その形からデザインを発展させたりしながら過

去と現代とをうまく絡め合わせる。歴史は経糸です。経糸だけ十分にあっても単なる糸の集まりでしかありません。そこに現代という緯糸を織り込むことで、初めて素晴らしい一枚の布が完成する。伝統と現代の交錯をいかに生み出していくかを考えることが、よい商品作りを目指す人には必要なことです。歴史を研究し、過去の遺産を上手に取り込んでいけば、現代の衣服文化からも非常に面白いものが生まれるでしょう。

コレクションという投資

F：今日のテキスタイル制作を取り巻く環境を考えると、日本では技術に定評のある機屋さんが次々と辞めてしまって、人々も安いものへと込んでいた自分の貯金、全部かき集めて一つの茶碗を買いました。おかげで1年間、予備校も行けずその日暮らして乗り切らなければなりませんでした。

それが私の原点です。無一文になってしまいましたが、逸品を得ることの大切さを学びました。その経験をバネに今まで来ることができました。そういう意味で、この茶碗は私にとっての先生です。今も手元に置いています。

このことが原体験としてあるので、今でも入ってくるお金は、裂とか他のものに全て変わって残りません。「宵越しの金は持たない」という江戸町人の気骨に近いかもしれない。これは、「今をいかにきちっと生きるか」という法華経に通じる考え方だと思います。そのための自己投資です。自分で自分に投資することによって、物が自分の心に染み入っていく……。

F：それがまた別の形で外へと染み出していく。発展的な循環ですよ。

蒐集、つまり所有という行為は、えてして手に入れた時点で満足してしまって、結局は「死蔵」することになります。先生はいみじくも「投資」とおっしゃいましたが、コレクションは活用、つまり、直接的でも間接的でも、それを基に何かしらの果実が生まれるからこそ、継続していく価値があると考えています。先程の「付加価値」もここから生み出される余地があります。ポワレもそういった付加価値を生み出した一人です。

M：テキスタイルや服飾の世界は、その可能性が非常に高いですし、これからも私たちの精神的な豊かさを育てていく存在にならなければいけません。

もう一つ重要なことは、「夢を見せる」ことです。夢は覚めなきゃ夢ではない。「大きな夢を見る」というのは、夢が現実化することを願うことより、たとえ成就したとしても、それは一時的でいつか必ず覚める「夢」なのだという覚悟を持っている、という意味合いがあると思われて行っています。産業に携わる人たちだけでなく、社会全体で優れたテキスタイル文化を守り、発展させていくべきですね。

M：やはり安いということは物事を衰退させていく原因になります。1,000円の商品を500円、500円を400円に下げていくと、最後は潰れるしかありません。大切なのは、1,000円のものをおいかに2,000円で売るか。いかに付加価値を付けるか。それが人間の知恵です。そして、その繰り返しの一つの文化を作っていく。付加価値は豊かさにつながります。物の豊かさではありません。精神の豊かさです。この精神的な豊かさをお金で買える社会になっていかないとはいけません。

初めて東京で買った古美術品が柿右衛門の茶碗でした。それが裂地も含めた私のコレクションの始まりです。18歳の時、受験浪人として東京に移り住んだ頃のこと、親から預かった1年分の生活費と学費、それまで貯めています。現実、夢と交じり合っているからこそ面白い。

「傾城の誠があつて運の尽き」という昔の川柳があります。花魁が、自分は真実で惚れられていると思ったら、もうそこで花魁の運命は終わっているという意味です。夢という虚の世界が入ってこそ、花魁の美は存在するのです。

その虚の世界を演出できるのがファッションであり、その素地となるテキスタイルだと思います。自分の現実の姿や内面の上に服を着せることによって、その人は変身することができる。自分を変えることができる唯一のものがファッションです。内面はそのままにして外側を変える。そして、ある時、外見に合わせるように自分が変わっていくことができる。人を育てる上でファッションはきわめて大きな要素を持っていると思います。

F：ありがとうございました。

〈図版〉

Fig.1 宮廻氏のコレクションより。シリアで入手した緻密な絹ベルベット。

An elaborate silk velvet from Mr. Masaaki Miyasako's textile collection.

Fig.2 宮廻氏のコレクションの一部。

Part of Mr. Miyasako's textile collection.

Fig.3 ロシアの伝統的なテキスタイルから作られたポール・ポワレのデイ・ドレス「カザン」（1911-12年 京都服飾文化研究財団所蔵 広川泰士撮影）

Paul Poiret's day dress, Kazan, made with Russian traditional textile (1911-12. Collection of The Kyoto Costume Institute. Photo by Taishi Hirokawa).

宮廻正明 (みやさこまさあき)

1951年、島根県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻修了。同研究科助教授を経て、2000年より現職。日本画を平山郁夫氏に師事。日本美術院同人、評議員。作品は国立西洋美術館を始め、国内外の美術館に収蔵される。2002年、再興第87回院展内閣総理大臣賞受賞。画集に『水花火』（2003年）。また、尾形光琳《燕子図》（国宝）等、文化財の保存修復プロジェクトにもかかわる。（※肩書は掲載時のものです）